

① 雨富検校

常陸国茨城郡市原村（茨城県西茨城郡友部町中市原山下・笠間市へ合併）の農家、塙林内の長男として生まれた。幼少のころ失明のため、郷里で按摩の修行をしたが、後に江戸へ出てさらに技を磨き、検校にまで昇進した。天明四年（一七八四）九月十二日没。

保己一の墓、右隣の五輪塔が雨富検校の墓



荻野検校（知）

平曲家、平曲中興の祖、平家正節」を編纂

検校とは

当道という盲人の座での位のこと

当道座（とうどうざ）とは、

中世から近世にかけて存在した男性盲人の自治的互助組織。

当道というのは「この道」、つまり道というのは芸能ですから、この芸能とか、われわれの芸能という意味で、自称として用いられておりました。中世には猿樂なども自らの芸を当道とよんでおりましたが、それがいつしか自称、他称で**盲人の座**を指すようになった

（近世の盲人と塙検校 加藤康昭）

当道とは

「幕府は当道を公認して自治を許し、**盲**人を当道に加入せしめて組織化し、自ら統制させる。
すなわち、寺社奉行を通して幕府は監督する。

「当道は検校、勾当以下の盲官を細分化（**七十二階**）し、初心という無官から昇進する毎に**官金を納付**させ、それを運上金と併せて座中で配当することを許可した。

「幕府は、当道が官金貸と称して**貸金**を行い、高利で利殖することを認めた。

「当道座と称するように座の形態をとっているが、一般の座や株仲間の如き座役、冥加、運上などの税は一切上納を**免除**した。

「京都の総検校を中心に、十老が多数決制度によって全国の当道を統轄、支配するという**間接支配**の形を採った。

元禄四年に至り、江戸の惣禄検校を置き、一部権限を分割委譲する（関東八ヶ国）

（小森嘉 「当道から見た塙保己一」）

四官(七三段階)

座頭 一度、二度、三度、四度
勾当 過銭、送物、掛司、立寄、召物、
始の大座、後の大座、
別当 権別当、正別当
・検校 六老、五老、四老、三老、二老、
一老(職総検校)

官金

階ごとに金額の定めがあつた。

半打掛前より是に至迄金七百十九兩なり、
以上六十七刻なり、
此後正検校五刻、六老、五老、四老、三老、
一老なり、一老を職総検校と云、都合七十
三刻終る。

(「当道から見た塙保己一」 小森 嘉一)



平家琵琶を用いた平家物語の語り物音楽

これを「平曲」と呼ぶ

（薩摩琵琶、筑前琵琶にも平家物語を題材とする曲が多数あるが、これらは近世以降に作られたものであり、音楽的には平曲とはまったく違うものである。）

伝承によれば、鎌倉時代阿のはじめ頃に生仏（しょうぶつ）という盲人音楽家がはじめたとされ、曲節には仏教音楽である声明（しょうみょう）の影響がみられる。

のち、

南北朝時代の盲人音楽家如一とその弟子明石検校覚（一二九九～一三七二）が改変、整理し、一方（いちかた）流を創始した。いつぽう城玄が創始した八坂流も生まれる。

（室町時代には能楽と並び広く愛好され、中世日本音楽の代表的存在として並び称される。）

江戸時代初期には前田検校により前田流が、波多野検校により波多野流が生まれ、前者は江戸を中心に、後者は京都を中心に行なわれた。

演奏は当道座に属する盲人音楽家により占有されていた

が、江戸時代には晴眼の奏者もあらわれた。

多くの盲人はかんがいいのが普通だが、**先生は例外であった。**

いつも道を歩くとき、曲がり角や橋や溝などの辺では引っかかって行くにくそうであった。

また、食事の時には、いわゆる握り箸で、碗の向こう側の端から口に掻きこむようにして食したという。

（「水母余音」意識 太田善麿）

十六歳・自殺を図る

宝暦十一年（一七六二）

「大人は文読むと思ふ事、始よりの根ざしなれば心そこにあらず、**されど師のいさめやむことなれば**、其筋のことをも習ふさまなれど、ともしればひまをうかがひ、文読ことのみを旨とす。」

「さはあれど、**門人の禄（ナリハヒ）となる術ををしふるは師の職分なり**、汝が好まざることなせといふにあらず、**賤と博とを除きてほかは**、何にまれ心にかなひたらんものをつとむべし、これよりして三とせが間汝を養ふべし、**三年へてなすことなくば速に郷里に送りやるべし**」といふ。

（中山信名「温故堂塙先生伝」）

二十一歳・父親と伊勢参り

明和三年（一七六六）

「為すことあらんと思うもの、病多ければ
果たすこと能はず。病ある人、旅に赴く
時はままいゆる事あり、思ふに汝が病も
またしかる事あらん、我金五両をあたふ
べし、我に代りて伊勢の神宮に詣でよ。」

（中山信名「温故堂塙先生伝」）



可愛い子には旅を」

吉野山



西行庵



吉野山に行て花をめでつつ、西行庵にしばしやすらひけるに、

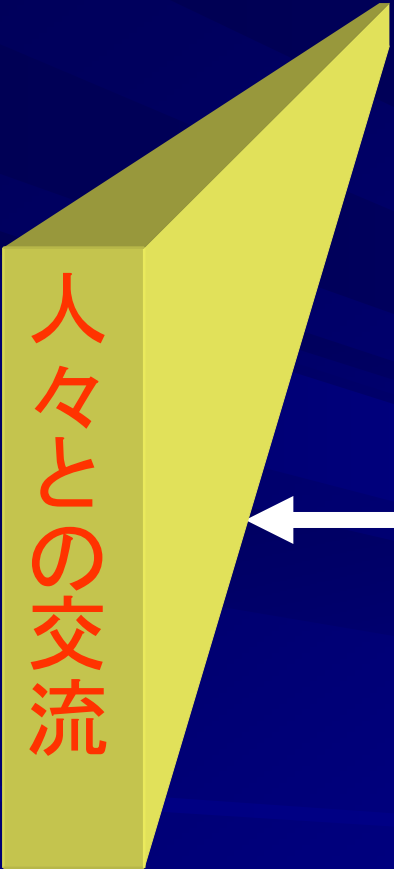
藤原秀齋という老人（法隆寺町人）。

又外にふたり、一人は龍田の人、一人は難波の人これも花見にとてここに来り合けるが、
かたみにうしはいづくの人ぞなどかたらいて、
かかる花の本にたいめしつるが、興あるわぎなれば、当座の歌よまんとて、秀齋よりはじめて皆よみたりしに、大人は

『盛りにはいづれをそれとしらくもの
かかるも匂ふみよしの花』

となむ聞えし。

（中山信名「温故堂塙先生伝」）



人々との交流

その昔、英国の貴族の子弟は学校ではなく、邸宅で家庭教師から教育をうけたのだが、その総仕上げが師弟ともどものヨーロッパ旅行だった。

そのせいか、いまの英国には大学進学が決まった生徒が、入学を一年遅らせて、ボランティア活動をしたり、世界を旅行したりするギャップ・イヤー（猶予年）という制度がある。ボランティア活動も異質な世界での活動だから旅といえる。

旅こそは最高の総合学習である。

「九世紀はじめの『旅行用心集』は、つぎのよう

長旅は艱難千苦万苦をともなうから若輩者にはなによりの修行になる、旅をしない人は、「人情にうつとく、人に対してわがままが多く、陰で人に笑い指をさされることが多い」。

石附実著「教育における比較と旅」